

# 「現前の形而上学批判」 とは何であったか

中村 康裕

「現前の形而上学批判」というのがあった。これは「ポスト構造主義」などという風潮として、一つの流行の中で語られてきた。現在に至ってはこの問題はもう済んだ問題であり「現前」は何か良くないものとして当りに認識され、すでに問題になることもなく、一体これがなんの問題であったかも分からないまま現在に至っているように思える。一体「現前の形而上学批判」とは何であったのか、これを敢えて今取り上げる。実は現前の問題が形而上学が追い求めてきた存在の問題を歪め隠蔽していた原因をつくっていたことが明らかになるだろう。さらにこの現前がある段階で消滅する地平で、存在の問題が実は時間の問題であったこと、さらには現前の問題は独我論の問題であることまで探究が進行するであろう。しかしここではまず現前の形而上学の問題を取り上げる。

## 1. デリダの「現前」批判 形而上学における現前

デリダが『グラマトロジー』といういまや歴史的な著作で主張したのは、形而上学がパロールを特権化する「ロゴス中心主義、音声中心主義」によって成立し、形而上学はしたがって「存在・神・目的論 ( onto-théo-téléologie )」の構造を持つことであった。ここでは何が問題になっているのか？

形而上学はある確実な根拠の上に成立する。どんな根拠か？ ロゴス、音声(表音文字)、存在、神、テロス(目的=終末)等である。デリダによれば、これら形而上学の根拠たらしめているものが、「純粹現前としてのパロール」(『グラマトロジーについて』以下 DG とする。数字は原文のページに相当する)である。このパロールを根拠の根拠として形而上学は成りたつ。パロールは、現在そこ

にある声を絶対化することで形而上学において特権化される。形而上学における現前の特権化である。プラトン以来の形而上学は、現前を基盤にし階層構造をなし、その頂点は究極の目的（テロス）である神的存在へいたる。つまり形而上学は「存在・神・目的論」である。形而上学が存在論を目指すのは、形而上学の欲望、つまり「根拠への営み」への希求が世界の存在自体の探究へ向かわせるためである。ハイデガーがそうであったように、後継者デリダは従来の形而上学の中に疑問を投げかける。現前は形而上学の基盤である。現前という前提の元に形而上学は成り立つ。しかしこの現前は形而上学の残物であるから、自己が自己を支えているという矛盾の中にある。形而上学は基盤のないような基盤の上に成り立っているのではないか？ 形而上学が目指す存在への問いそのものへハイデガーとデリダは向かう。現前というのではないもっと存在自体に触れる領域を目指すのだ。その存在論とは何か。これがまさしく本来の形而上学であるのだ。

## 2. ハイデガーの存在論

ハイデガーによれば、本来形而上学は存在論であるべきであるが、従来の存在論は、存在の探究において存在者のレベルにしか至っていない。真に存在を捉えるべきが形而上学の本来の姿である。なぜ存在論が存在者の域で終るかという形而上学が基盤としているものが現前というものによって成り立ち、それがまさしく存在者そのものであるからなのだ。本来の存在論は存在そのものに至らねばならない。形而上学はハイデガーの言うように語源的には「存在者を超えて問う」ことであり、何を問うかと言えば「存在を問う」ことである（『形而上学入門』）。一般的には「存在の問い」とは存在者そのものを問うことである。しかしハイデガーは『存在と時間』の中で存在そのものを問うことを試みた。デリダはハイデガーの存在論を継承し、この存在の問いの試みから出てきた、存在を存在者を超えたところで思考することを志向する。形而上学において存在そのものは隠されており、忘れられている。いわゆる存在忘却である。ハイデガーの従来の形而上学に対する在り方の一つが、この存在忘却という視点である。形而上学は存在に向かいつつ実は存在から遠ざかる。したがってハイデガーは独自の形而上学、つまり存在への道、つまり存在論を展開するので

ある。ハイデガーが『存在と時間』で考察する基礎存在論は、まず既成の存在論を「解体 (Destruktion)」するという形で行われる。ハイデガーの「解体 (Destruktion)」の武器となるのがこの「時間性」に基づいた「現前」である。ハイデガーは、時間の概念と関わりながら (つまり「存在」と関わりながら) 現在としての「現前」が歴史的に見て特権化されていることが、「存在」の忘却につながったという視点で形而上学を解体していく。

### 3. 現前からエクリチュールへ

現前が存在者であるとするれば真なる形而上学において、現前は乗り越えられべきものとなる。形而上学の基盤である現前は根拠の資格がなくなる。ここにデリダの現前の形而上学批判が現われる。デリダは現前の形而上学をどのように批判するのか？

ロゴスはことばであり、ことばはパロールのことである。そして発したことばの音声実体でもある。それは真正でまじめでゆるぎなく確実でしかも意味を充実させている。舞台での台詞のように非まじめで嘘ではない。このパロールはハイデガー流に言えば「存在者」である。そしてパロールはまさに現在そこに目の前にある現前として存在する存在者のことである。形而上学はパロールの現前が確実に存在することを絶対視してきた。コギト、意識、自己への現前としての主観性。これらを現前の形而上学と言う。デリダはこの現前の形而上学を批判し、パロールの優位性を攻撃し、エクリチュールがパロールの二次的要素、あるいは代補として歪められていることを指摘する。デリダのエクリチュール論が現前の形而上学批判の武器になっていくことをみていこう。

デリダのこのエクリチュールをまず見ていこう。デリダにおけるエクリチュールはパロールよりも序列的に優位にあるという意味でのエクリチュールではない<sup>(1)</sup>。デリダがエクリチュールに注目したのは別の狙いがある。西洋哲学の伝統の中で、エクリチュールがパロールの二次的な「表象・代理 (représentation)」であり「補い・代補 (supplément)<sup>(2)</sup>」である。デリダはまずその考えそのものに、根源的な問い直しを要請したのである。

パロールを支えるものはエクリチュールである。パロールがパロールであるためにはエクリチュールの前提が必要であろう。そうしたエクリチュールがデリ

ダのエクリチュールである。エクリチュールとパロールは、あとで説明するようにどちらもエクリチュールなのであるから、実はそのどちらも特権化する必要はない。パロールをいたずらに特権視するのではなく、エクリチュールをパロール=ロゴスによる暴力から擁護することにある(DG31)。デリダがパロールの特権化をどのように批判するのか？ そのパロールを特権化している「声(phonè)」や「音声実体(substance phonique)」(DG17)を通じて「自分が話すのを聞く(s'entendre-parler)」(DG17)という図式が「世界の観念」や「世界の根源という観念」を生み出した。こうした図式がエクリチュールをパロールの副産物としてしまう元凶となる<sup>(3)</sup>。つまりエクリチュールは「現前するパロールの翻訳者、パロールの代弁者(porte-parole)」になってしまったのである。こうしてデリダは、エクリチュールという戦略的概念を独自の視点で新たに創設した。デリダは『グラマトロジーについて』において「エクリチュール以前には言語学的シーニュは存在しない」(DG26 il n'y a pas de signe linguistique avant l'écriture)ということを行っているのは興味深い。

#### 4. 差延とエクリチュール

今度はエクリチュールを「差延(différance)」という視点から考察してみよう。差延とエクリチュールは相補的に連関している。

我々が日常で言語を用いるとき、その言語を口に出すわけであるが、その口に出す瞬間の言語の原形のようなものが原 エクリチュール(archi-écriture)であるといえよう。「その口に出す瞬間」という時間的な問題は省かれなくてはならない。エクリチュールにおいて、言語の原形が言語として口から現われるその時間的間隔は存在しない。我々にとって言葉は思う間もなく言葉になるのであるからその時間的差異は認められるべきではない。こうした時間のずれを原初の方向へ向かうとき、時間的ずれは時間的な時間をもっていない。この営みをデリダは差延という用語で説明するのであろう。差延はしたがって時間的、空間的な根拠を探し当てることの不可能性を悟らせる。現前においても同様に差延においては現前しないことになる。

実際の「生活」の中では「言語」は透明な存在である。デリダは直接言及していないが、原 エクリチュール(archi-écriture)は、言葉が言葉として出てく

るその前の言葉である。「パロールのエクリチュール」の要素、つまり口に出す前の言語の原形のようなものを原 エクリチュール (archi-écriture) と呼ぶのがふさわしいだろう。デリダにおいては、原 エクリチュール (archi-écriture) はエクリチュールの意味で使われることがある。概してこの二つは同義的である。原 エクリチュール (archi-écriture) はさらにいえばまだ言葉になる前であるような、言語以前ではないが、いまだ未分化なことばの世界に住むのであり、いまだ時間的、空間的なものを与えられていない世界に住むといえよう。

「エクリチュールのエクリチュール」の要素 (書く前の書くべき言語の原形のようなもの)つまり原 エクリチュール (archi-écriture) の要素も持っている。「パロールのエクリチュール」の要素は、パロールとして口に出す前の段階のエクリチュールということになる。そして「エクリチュールのエクリチュール」とはエクリチュールになる前のエクリチュールということだから、これもデリダは原 エクリチュール (archi-écriture) と呼ぶのであろう。

差延はここでこの (本来存在しない) 時間的間隔を露呈させるための戦略的武器なのである。この原 エクリチュール (archi-écriture) がデリダの言う「エクリチュール」なのであるし、また「パロールのエクリチュール」をパロールの特権化から擁護する。ある意味で差延は後者の「パロール」の部分にある「時間性 (もちろん現在としての現前)」を取り除く事で、「パロールのエクリチュール」を取り戻すのである。

「差延 (différance)」の、e と a の間 (entre) に記された差異は、書記上のもので、聴覚的な差異ではない。このエクリチュールについての遠回しの言説は、必然的で、しかも不可避免的に書かれた「テキスト」を要求する。

e と a の間 (entre) の書記的差異のピラミッド的沈黙が機能しうるのは、音声的エクリチュールの内部だけであり、ある (小文字の) langue、或いは、ある (小文字の) grammaire の内部でだけ機能する<sup>(4)</sup>。

このlangue、或いは、grammaireは、「それらから離れることのできない文化の全体と結び付いているように、音声的エクリチュールに歴運的に結び付いている<sup>(5)</sup>」。

また「ある巨大な偏見・先入観 (préjugé) に反して、音声的なエクリチュールは存在しない。」つまり「純粹且つ厳密な音声的エクリチュールは存在しない」のである<sup>(6)</sup>。ソシュールの言うように、あらゆる記号の可能性と機能の条件であるような、「差異の戯れは、それ自体沈黙している」<sup>(7)</sup>。実は、「純粹に音声的であるような音素 (phonè) は存在しない<sup>(8)</sup>」。音素の中にあり、かつ聞こえさせている差異は「それ自体では聴取不可能のままである<sup>(9)</sup>」、つまり聴覚的差異は沈黙していると言える。従ってデリダのエクリチュールは、時間も空間も感覚も介在しないような「言語」の「語り得ない」その「在り処」をいうのだ。もちろんその「在り処」とは「語り得ない」在り方をした「在り処」である。

## 5. 現前からの問い

エクリチュールは従って形而上学の内部にあるものであるにせよ、決して現前しない。それは現前したと思ってもすぐに消え去っていく。あるとすればただ痕跡として残るようなものである。現前としてのパロールのようにそこに確実にある存在ではない。差延もこの現前を消滅させていくエクリチュールの戦略である。デリダのエクリチュールは従って現前しない。このエクリチュールこそが形而上学を支えている。エクリチュールは形而上学の根拠であるが根拠ならざる根拠ということになる。デリダは形而上学の根底の基盤の底が抜け落ちていることを暴いたことになる。それはデリダがエクリチュールを差延において示すことで、形而上学が自己への現前という自閉的な世界に閉じるのを脱構築した。そしてエクリチュールはハイデガーのこのような存在論へ向かうことができるであろうか？ 現前としてのパロールが脱構築され、形而上学の基盤はエクリチュールがささえることになったがそのエクリチュールはどのように存在をとらえるのか？ 現前、つまり現在という時間が差延によって、確固たる確実な基盤を作らなくなった時、現前という時の概念はどこにいくのであろうか？ 時間的差異がなくなるような次元で、実は存在自体が立ち現われるのではないか？ ハイデガーは何故存在と時間が同時に語られなければならないと言ったのか？ この多くの問題を前にして、我々はそれでもなお現前という問題から哲学を眺める必要がありそうである。

## 註

- (1) デリダにおけるルソーの『言語起源論』批判は、単純にパロールにおけるエクリチュールの優越性を主張するものではない。Ch・ノリスは『デコンストラクション』邦訳 47-51 において、エクリチュールは言語の前提であり、パロールに先立つとしながらも、エクリチュールを特権化するものではない、と見ている。またロラン・バルトはデリダと違い、エクリチュールよりもむしろパロールを暗に特権化しているのではないだろうか。
- (2) デリダは *supplément* を単純に退けるのではない。*supplément* は「あまり、過剰」という意味であり、この過剰がなくては実は記号自体が記号として成立しないのである。この *supplément* は痕跡 (*trace*) というデリダの概念と関連していることもここで示唆しておく。デリダはルソーがエクリチュールを「パロールの代補」(邦訳 24 頁) とよんだことを受けて、「代補についての新しい論理の構築」を考へることが『グラマトロジーについて』の第 2 部で行うべきことであるとしている。
- (3) デリダ『声と現象』第 6 章「沈黙を守る声」にその考察があるほか、*Politique de l'amitié* (1994) の中の *L'oreille de Hiedegger* でハイデガーが『存在と時間』において「自分が話すのを聞く (*s'entendre-parler*)」という立場を取っている部分を指摘している。ハイデガーの該当箇所は「おのおのの現存在が心に抱いている、友人の声を聞くこととして」(SZ16326) である。この部分をデリダは取り上げている。この部分はハイデガーが『存在と時間』で唯一言語の考察をしている部分 (第 34 節) である。(『存在と時間』を SZ とし、そのあとの数字は左 3 桁をページ、右 2 桁を段落の数とした)
- (4) Derrida: “La différance”, dans *Théorie d'ensemble* collection Tel Quel, Seuil, 1968, p.43 (「ディフェランス」『理想』1984 年 11 月号, 69 頁): ce silence pyramidal de la différence graphique entre le e et le a ne peut-il fonctionner qu'à l'intérieur du système de l'écriture phonétique et à l'intérieur d'une langue ou d'une grammaire historiquement liée à l'écriture phonétique comme à toute la culture qui en est inséparable
- (5) Ibid.
- (6) Ibid.: contrairement à un énorme préjugé il n'y a pas d'écriture phonétique. Il n'y a pas d'écriture purement et rigoureusement phonétique.
- (7) Ibid.: ce jeu est lui-même silencieux
- (8) Ibid.: c'est qu'il n'y a pas de phonè
- (9) Ibid.: La différence... reste en soi inaudible

# A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の  
機関誌『AZUR』第1号(2000年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises  
de l'Université Seijo

[http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur\\_index.html](http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html)